Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-05-09

自己愛(narcissism)概念の再検討に向けて : フロイトにおける視座の展開にてらして2

相澤, 直樹

(Citation)
神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要,2(1):149-158

(Issue Date)
2008-09

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81000818

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81000818

KOBE UNIVERSITY

神戸大学大学院人間発達環境学研究科
研究紀要第２巻第１号　2008

研究報告

自己愛（narcissism）概念の再検討に向けて
―フロイトにおける視座の展開にてらして②―

Toward a reconsideration of narcissism: Freud's view point and the change of the concept ②

相　澤　直　樹*
Naoki AIZAWA *

要約：本稿では，相澤（2008）における試みの継続として，自己愛に関係する論考が多く含まれるフロイトの著作に着目して，そこに推定されるフロイトの視座と自己愛概念の変遷について検討した。その結果，「自伝的に記述されたパラノイア（早発性痴呆）の一症例に関する精神分析的考察」ならびに「ナルシシズム入門」から「集団心理学と自我の分析」にいたる自己愛に関する記述を考察したところ，フロイトの視座の重点が「自我から対象」に移行するにつれて，一次的な自己愛と自体愛の区別が重要視されなくなる変化がみうけられた。このことは，自己愛におかれていた自我の萌芽としての意義が，対象との同一化の過程に譲り渡されたものと推定された。しかしながら，後期の著作「自我とエス」を検討したところ，フロイトのその後の視座の変遷は，「自我から対象」への移行として単純化してとらえることが困難であることも示された。以上のことから，フロイトの自我（自分）を重視する視座が自己愛概念の形成に結びついていたことが一定程度示唆された。

１．はじめに

本稿の目的は，自己愛（narcissism）の再検討にむけた一つの準備をおこなうことにある。相澤（2008）において，筆者は，自己愛の理解にあたって“見る者の視座も含めた検討”の必要性を提起し，“幼若な心性に対しそれに関わる者が成熟した自分を前提に相手に付与する判断”という定義を仮定した[1)]。この仮説を検討するためには，患者を自己愛的と判断した経験をもつ者の視座を検討する必要が生じたが，筆者にはそのような臨床上の経験が乏しいために，フロイトの視座に焦点をあてて検討をおこなうこととした。前稿では，フロイトの視座の全体的な流れを大まかにおさえたので，本稿では，特に自己愛について詳しく言及されている著作に着目し，そこに示されるフロイトの視座と自己愛に関する記述との関連，ならびに，それらの変遷について検討する。

２．自己愛に関する最初の記載と「自伝的に記述されたパラノイア（早発性痴呆）の一症例に関する精神分析的考察」

ラプランシュとポンタリス（1967）によると，フロイトが初めて自己愛にいて記述したのは，「性欲論三篇」の注釈（1910 年改訂）の中において，である。確かに，フロイトは，性対象倒錯（同性愛）における性対象の性質について述べた個所の長い脚注の冒頭で，自己愛に言及している（著作集 ,5,16-17）。しかし，そこでは，性対象倒錯の普遍的な重要性に議論の中心がおかれており，自己愛についてはそれらの発達的な起点として簡略に触れられているに過ぎない。また，同年に出版された「レオナルド・ダ・ヴィンチの幼年期のある思い出」の中においても同性愛との関係で自己愛についての言及がみられる。ここでは，同性愛の発生についてより詳細な論考がなされている。しかし，自己愛については，その発達上の意義を幾分か示唆する程度の考察が付加されていることと，この用語のギリシャ神話における由来についての言及がみられることにとどまっている。

フロイトは，「自伝的に記述されたパラノイア（早発性痴呆）の一症例に関する精神分析的考察」（1911，著作集，9，p.283-347）[2)]において自己愛についてまとまった考察を記述している。「シュレーバー・ケース」として知られるこの症例研究は，周知の通り，社会的には高い地位にあったダニエル・パウル・シュレーバー法学博士が自らの精神病体験を世に問うた「ある神経病者の手記」という回想録に基づくものである。フロイトは，その手記の内容を分析することを通じて，パラノイアの精神分析的考察を試みている。その概略を示すと以下のようになる。フロイトは，シュレーバーの複雑な病状変化を検討し，病状の悪化が著しい初期の主治医フレヒジッヒ

＊神戸大学大学院人間発達環境学研究科講師

（2008年４月１日　受付
2008年９月１日　受理）

に対する迫害妄想（性的な脱男性化）の段階から，軽快にともなってあらわれる宗教的な誇大妄想（神からの寵愛と救済の使命）への推移をみいだす。そして，発病初期から終始一貫して女性への転換（脱男性化）の空想が重要な役割を演じていたことに注意をうながし，かつ，シュレーバーの妄想における神の性質（関係する神経，幸福，神の階層組織などを含めて）について検討することで，その推移に女性化に対する抵抗から受容にいたる流れを推定する。さらに，フレヒジッヒとの初期の治療関係の記録から，患者－主治医関係における性愛的な体験を推測し，シュレーバー発病の契機をそこで体験された同性愛的願望の噴出にもとめるといった考察をおこなうのである。

パラノイアの発症契機に同性愛的願望を位置づけるフロイトの考察は，一見するところ唐突な印象を抱かせる。[3] しかしながら，すでに，フロイトは，1905 年の「性欲論三篇」において，性欲動の働きに独自の発達的意義を付与している。その観点からいえば，上記の着想は新しく探求すべき重要な領域を指し示していることになるのである。すなわち，諸種のパーヴァージョンが精神神経症に対応する関係にあること（「神経症はいわばパーヴァージョンのネガティフ（陰画）なのである。」，著作集，5，p.33），そしてまた，パーヴァージョンが通常の小児期における性発達に由来（固着）をもつことは，すでにフロイトの中に確立されている関連である。そのことを考慮するならば，パラノイアに対応するそれが同性愛であるとの関係が見いだされたことは，それらの由来する小児期の一段階が推定されなければならないこととなる。このような流れの中で，フロイトにより提起されたのが自己愛の発達段階である。

この論文の中で，フロイトは，後々の自己愛の論考に関係する重要な議論のほとんどを取り上げている。まず，自己愛の発達段階としての位置づけについては，「リビドー発達史における一段階，すなわち自体愛 Autoerotismus から対象愛に発達する途上で経過される一段階」であり，「個体の発達過程で，それまで自体愛的に活動していた性本能を個体が統一化して，これを外的な一定の愛情対象に向け」ることを常とする中で，自己愛とは「その変化に先立ってまず自己自身，すなわち自己の身体そのものを愛情対象としている状態をいう」とされる。また，その状態では自己の身体の中でも自己の性器が重要な役割を担い，そのために「自分のそれと類似した性器をもった対象」の選択，つまり同性愛的な対象選択が生じることも論じられている。さらには，このような同性愛的欲求は，対象選択の成立以後も残存しうることを強調し，ただそれらが直接的に性目標に向かうのではなく，「自我本能の『共同作用的』な因子として社会的本能を形成し，同時に性愛を友情，団結心，公共心および一般的な博愛心に昇華する形成過程に寄与する」ともしているが，ここに後々自我理想として論じられる主題の萌芽をみることができる（以上，著作集，9，p.328）。

一方で，以上ほど明確ではないにしても，後々の議論に関わる記述として以下の 2 点があげられる。ひとつには，フロイトがパラノイアの疾患発生について，社会的本能欲求の挫折による前述の昇華過程の再性欲化を指摘し，「昇華された同性愛から自己愛への逆戻り」を強調していることである（前掲書，p.339，傍点原訳文通り）。いまひとつは，パラノイアにみられる世界崩壊の妄想を指摘して，そのことを周囲および外界の人々に向けられていたリビドー備給の撤回によるものと説明している箇所である。これら 2 点の記述は，後々に自己愛の二次性の議論に結びつく着想であるといえる。

以上のように，本論文の主題は，自己愛に関係するものだけでも多岐にわたる。その中で，フロイトの当時の視座を推測させるものとして，ここでは同性愛の論考を取り上げたい。同性愛は，シュレーバー・ケースにおける最重要主題でもある。自己愛との関係では，以下のように説明されている。つまり，自己愛的な段階では，愛情の対象は自己の身体，なかでも自己の性器が中心的な役割をになう。このことは，自分のそれと類似した性器をもつ対象の選択に結びつく。この同性愛的対象選択は，後々には異性愛的な対象選択に取って代わられるものではあるけれども，基本的には成人の精神生活の中においても残存していく。なかでも，成人の同性愛的願望は，この初期の自己愛的な対象選択がそのまま優勢であることに基づいて生じると解釈されるのである。

一方で，同性愛に関する精神分析的解釈は，わずか一年前に公開された論文「レオナルド・ダ・ヴィンチの幼年期のある思い出」（著作集，3，p.90-147）のなかにもみられる。ここで，フロイトは，歴史的な資料の中からダ・ヴィンチに潜在的な同性愛的傾向をみいだす考察に取り組んでいるのであるが，その中で同性愛的願望の展開は以下のように論じられる。つまり，早期に母に対する非常に強い性愛的な結びつきを経験した場合，その母との結びつきは抑圧されつつも維持されて，そのために情愛を新たな異性対象に向けかえることに困難が生じる。その際，時として次のようにして性愛的欲求が実現される。つまり，「子供は自分自身を母の位置におき，母と一体化し，彼自身を手本にして，その手本に似た者から新しい愛の対象を選ぶ」というものである（著作集，3，p.118）。いわば，成人になって同性愛を示す者は，母親との強い情愛的結合を，母の位置に自分が立ち，自分の位置に新たな同性の対象を置くことによって，同性愛として反復しながら維持するものとみなされている。

以上の同性愛に関する解釈は，いずれも単独でみれば筋が通っているように思われる。しかしながら，それをそのままうけとめると，フロイトがほぼ同時期に同じ主題について二つの理解を示したことになる。両者の解釈は，決して同一のものではない。シュレーバーの同性愛的願望は，幼少期の自己愛的な心の働きから直接にその残存として生じてくるものであるのに対して，ダ･ヴィンチのそれは，母との性愛的な一体化が中心となっていて，同性愛的願望はむしろ新たな異性対象を回避するための結果的なものである。以上のことから，フロイトがこの時期に 2 種の別個のそれを考察したと結論づけることも可能であろう。なによりも，「性欲論三篇」の中で，同性愛の多様性については十分に考慮がなされてもいる。そこには，一見しただけでも上記の区別に対応しそうな同性愛の種類（「絶対的な性対象倒錯者」と「両性にわたる倒錯」，著作集，5，p.8）が示されてもいるのである。ただし，もしそうであれば，同時期に示された同主題にかかわる理論の相互関係について，フロイトによる何らかの言及があってもよいと思われるのであるが，筆者の確認したかぎりでは，フロイトの著作の中にはそのような個所は発見できなかった。またそれだけでなく，（6 節で論じるように）フロイトの後期の著作の中では，シュレーバーにみられる同性愛解釈についてはほとんど言及されなくなり，ダ・ヴィンチ型の同性愛解釈が主要な発生過程として繰り返し登場することになるのである。このこ

とからも，ここでの問題について上のように考えるだけでは必ずしも理解できないことがわかる。

その意味で，このような２つの同性愛に関する解釈について，フロイトの視座の影響を考慮に入れて理解することもひとつの方法であると思われる。つまり，まずダ・ヴィンチの同性愛解釈においては，母親，すなわち，対象の役割が重視されている。そこでは，男児は，初期の母親との強い性愛的な結びつきを維持するために，自己の身体（と性器）を母親と一体化させ，自我はそれに性的リビドーを差し向ける。自我は，この強い性愛的結びつきを抑圧してしまうためにそのまま実現することはないが，一方で，母親（＝身体，性器）の位置にたって，自我の役割を新たに獲得された同性の対象に譲り渡すことによって同性愛的願望を定着させる。以上の解釈では，母親という対象の働きが特に重視されていることがわかる。一方で，同じ構造について，自我の方に重点を置いて，つまり，対象の働きを省略して記述することも可能である。その際には，対象（母親）に向けられたものとして記述されていた性的リビドーは，自然発生的に自己から発して自己（の身体と性器）に向かうようなものとして，自己自身に向けられた性的欲求を自己自身で満たすような閉じられた状態としてみえてくる。それと同時に，前述の自我の役割を新たな同性の対象に譲るという関係は，同一の身体（と性器）をもつ対象を選択する働きに読み替えることができるのである。これは，そのままシュレーバーの同性愛解釈となっているとみることができる。つまり，ダ・ヴィンチの解釈において母親対象を含み，自我と新しい同性の対象とを含む関係は，そこから母親対象とそれに関わる情愛的関係を無視するようにしてながめてみると，ちょうどシュレーバーにおける同性愛解釈で示されたものと同様にみることが可能なのである。以上のように考えると，ここで論じられている２つの解釈は，個々別々のものではなくて，フロイトの視座の移行（対象から自我へ）によって同一の出来事が二様に解釈されたものと推定できる度合いが高まってくるものと思われる。

しかしながら，以上の推定も必ずしも単純にはいかないものであり，かなり複雑な未解決の問題を内包している。第一に，上記の考察は，フロイトが示している性的発達の流れを無視しているという批判があげられる。つまり，ダ・ヴィンチの同性愛解釈は，発達的にかなり進んだ段階，少なくとも異性の対象選択が可能となった後の展開を問題としているのに対して，シュレーバーのそれは，原初的な自己愛の段階の直接的な影響によるものである。したがって，両者を簡単に置き換えることはできないとみなすことも可能である。確かに，この時点でのフロイトは，幼児性欲の重要性について言及しながらも，リビドーとの関係では委託的な性質を強調しており，対象備給の原初的な働きは認めていないようにみえる。そうだとすると，上記の読み替えはそのままでは成立しないことになる。第二には，上の考察が，フロイトが後に重視することになる対象備給と同一化との区別を問題にしていない点で，精神分析学の後々の展開に対してはあてはまらないと指摘できるかもしれない。確かに，ダ・ヴィンチの同性愛解釈にみられる対象（母）との一体化という作用は，のちに対象備給と同一化とに分けて別々に論じられることになる。したがって，その点についても単純には解決できない要素を含んではいるのである。

３．「ナルシシズム入門」

シュレーバー・ケースでの発表を経て，フロイトは，自己愛の問題を集中的にあつかう論文を書き上げる。それが 1914 年に発表された「ナルシシズム入門」である。この論文の個々の内容面について検討する前に，執筆にあたってのフロイトの意図に触れておくほうが良いと思われる。ストレイチー（北山監訳，2005，所収）によれば，この論文の原題の直訳は「ナルシシズムという概念の導入について」となりうるものである。そして，ここでの導入とは精神分析学に向けてのそれであると思われる。つまり，この論文においてフロイトは，それまで断片的に言及してきた自己愛の概念を精神分析理論全体の中に位置づけるべく意図しているのである。その意味で，ここでいう「入門」とは，すでに完成された理論を読者向けてわかりやすく解説した意味での入門なのではなく，精神分析学に対するこの新しい概念の導入の試みとしての「入門」とみなすのがふさわしいものと思われる。

以上のことをおさえて，本論文の内容についてみていくと，自己愛に関する主な主題は，いずれもがシュレーバー・ケースにおいてすでに取り上げられていたことの明確化と進展であることがわかる。つまり，発達段階としての自己愛については，発達原初の自己愛状態を「第一次的な正常なナルシシズム」として明確化して，これを統合失調症の誇大妄想にみられる自己愛的な態度である「二次的な」自己愛から区別する必要性を示している（著作集，5，p.110-111）。そのうえで，「自我にふりあてられた根源的なリビドーの割り当て」としての「リビドーの格納」という概念を提示するわけであるが，この論文における理論上の進展のひとつがここにみられる。ここから「自我リビドー」と「対象リビドー」の区別という考え方が導入され後々の議論に引き継がれる。いまひとつ，フロイトは，この同じ点について重要な考察をおこなっている。それは，自己愛と自体愛の区別を論じた中にみられるもので，そこでフロイトは，「ナルシシズムを形成するためには，自体愛になにかほかのものが，つまりひとつの新しい心的作用がつけ加わらなければならない」としているのである。この部分の指摘は，自己愛概念の再検討をめざす本稿の主題にとって非常に重要なものである。なぜならば，ここで述べられている「ひとつの新しい心的作用」こそ，自己愛と自体愛を区別する要点であると思われるからである。もしそのことがなければ，自己愛は自体愛と区別することができなくなる，つまりは，自己愛という概念の意義の一端をこの箇所の考察が支えていることになる。この前の文章で，自我の発生について触れていることから，おそらくここでは自我にかかわる「ひとつの新しい心的作用」が念頭におかれていたことが推測される。

他の主題に目を向けていくと，多くの論点において議論の明確化と進展が見うけられる。同性愛にかかわる主題は，ここではより一般化されて対象選択の二つの型として論じられている。つまり，成人の対象選択の発達してくる道筋について，自己保存の機能に付随して生じてくる初期の自体愛的な性的満足の体験に起源をもつがゆえに，小児期において養育し世話をしてくれる人物を典型として生じてくる「委託型」の対象選択と，幼児期の自己愛に起源をもつがゆえに，自己自身を典型として生じてくる「ナルシシズム型」の対象選択がある，という図式が提示される。ここでいう自己愛型の対象選択は，前節の２つの同性愛の発生過程に照らしていえば，シュ

レーバー・ケースにおいて解釈された同性愛の発生過程に属する。このことは，再び一定程度この論文におけるフロイトの視座を示唆しているといえるのではないだろうか。

また，このことと関連して，シュレーバー・ケースにおいて，友情，団結心，公共心および一般的な博愛心への昇華として論じられた点についても大幅な進展が示されているように思われる。フロイトは，小児期における自己愛の発達的な運命の一つとして自我理想の概念を導入する。「彼が自己の理想としてその現前に投影するものは，彼自身が自己の理想であった幼時の，失われたナルシシズムの代理物なのである」とする（前掲書，p.126）。そして，そのような自己愛の代理的な満足を確保するために自我に関する何らかの「心的法廷」の存在を示唆して，そこから一般的にいわれる良心の問題と統合失調症にみられる注察妄想の考察を提示している。ここで示された理論的進展も，後述するように本稿の課題に関係する重要なものである。

以上のように，フロイトは，この論文の中で自己愛に関する考察を大きく進展させているのであるが，一方で，意外にも一次的な自己愛についての言及が少ないという印象がもたれる。むしろ，再三にわたって一次的な自己愛を直接理解することの困難さを指摘している（「ナルシシズムを直接に研究することにはこれを妨げるいくつかの特別な困難があるように思われる。」前掲書，p.116）。そのため，自己愛に関するフロイトの視座を推定させるような個所も比較的少ない。その中で，以下の箇所があげることができる。すなわち，フロイトは，再度自己愛研究に際しての困難さに触れたのちに，それは「むしろ別の観点からの逆推論によって証明するほうがやさしい」として，両親が子どもに対してとる態度を通じてその性質を考察しようとしているのである。両親は，「冷静に考えればなんのいわれもないことだが，いろいろな完全さが子供にそなわっていると考えたり，（中略）子供のあらゆる欠点を忘れたりする」ものであり，「とっくに放棄してしまった特権を子供において復活しようとするような傾向」を生じさせる。また，子どもは「人生を支配していると認められてきた多くの必然事に従事すべきではない」ものであり，「病気や，死や，享楽の放棄や，自由意志の制限などは子供には無効であるべきだし，自然法則や社会法則も子供に対して停止」されなければならないとみなしがちである。そして，フロイトは，両親が子どもにみいだすこのような性質こそ，「もうとっくに放棄された自己のナルシシズムの復活であり再生にほかならない」としているのである。

以上の記述は，本稿の冒頭で示した自己愛に関する仮説（幼若な心性に対しそれに関わる者が成熟した自分を前提に相手に付与する判断）そのものを意味しているかのような印象が抱かれる。つまり，両親は，成熟した観点からみた自己の幼若な心性（の記憶）を目の前の子どもに付与することで，子どもを完全で特権的な位置にあり，あらゆる現実的な制限から自由であるべきものとして判断するのである。そして，ここで述べられている性質こそ自己愛そのもののように思われる。ただし，この記述をもって，フロイト自身もここで述べられている両親と同じような視座でもって，成熟した自分を前提に論考を進めていると断定するのはあまりにも単純すぎるであろう。ただし，上の箇所が，この論文の中で一次的な自己愛の性質について最も直接的に述べている箇所であることも確かである。そして，それ以外では，一次的な自己愛に接近することの困難さを指摘するとともに，一定程度離れた他の主題（器質疾患，ヒポコンデリー，対象選択，自我理想）からの推論に向かう流れの反復によって，本論文の全体は構成されている。以上のことを考慮すると，一定程度フロイト自身も同様の視座に立っていると推定することは必ずしも的外れではないように思われる。

4．「悲哀とメランコリー」と「精神分析学入門」

「ナルシシズム入門」以降，フロイトの著作の中では自己愛の問題に特化した論文は書かれていない。その代りに，前稿（相澤，2008）で多少触れることができたとおり，1915年以降フロイトの論文は自らの視座の大幅な展開を企図したものが増加する。ただし，その中においても，常にフロイトが自己愛の問題を視野にとめていたことは，たとえ部分的であるにしても自己愛について言及した箇所が決して少なくないことに示されている。そして，いくつかの論文においては，自己愛にかかわるフロイトの視座を推定するにたる重要な記述がみられるのである。

そのような論文として，「悲哀とメランコリー」（1917年）をあげることができる。この論文では，メランコリーと同一化の問題が主に扱われている。[4] つまり，フロイトは，正常な悲哀とメランコリーを比較して，ほとんどの点で両者は同一の特徴を示すものの，メランコリーでは自我感情の低下がみられる点，ならびに，失われた対象が意識されていない点で異なることを指摘している。そして，悲哀では対象の喪失として体験されるものがメランコリーでは自我の喪失となっている矛盾点を取り上げ，その点について，メランコリーにおける自責の表明が本来は失われた対象に向けられる攻撃の自我への転嫁であるとの解釈にいたる。そして，このような体験の成立を可能とする働きとして「自己愛的同一化」の過程を提示するのである。そこでは，何らかの事情により対象に充当されていたリビドーが撤退させられるが，そのリビドーは他の対象に向けかえられることなく，対象と自我の同一化にもちいられる。このことにより，「対象との自己愛的な同一視が愛の充当の代用となり，愛の充当は愛する者との葛藤があっても放棄されないことになる」（著作集，6，p.142）。メランコリーについていえば，対象の喪失においても自我がその対象となることによって対象との愛情関係は維持されるが，そのかわりに，対象への攻撃性が自我へと向かい自責と後悔の苦悩を引き受けなければならないこととなる。

以上の考察の中では，「自己愛的」という用語は，リビドー備給が対象から自我に撤退するという意味合いで用いられている。その意味では，二次的な自己愛のことをさしている。ただし，従来の二次的自己愛とは大きくことなる働きが挿入されていることは明らかである。すなわち，以前の誇大妄想の解釈では，リビドーがそのものとして対象から自我へと撤退することが強調されていた（「彼（パラフレニアの患者）は自己のリビドーを外界の人間や事物から実際に撤退してしまい，これらのものを空想の中で他の者によって補充することはないように思われる。」著作集，5，p.110，括弧内引用者）。それに対して，自己愛的同一化では，リビドーの撤退は同一化の働きを介して対象の性質を自我にひきいれることとなる。いうなれば，リビドーは，対象の性質を付加させたまま自己愛的に自我へと撤退するものとして論じられているのである。

以上の理論上の進展を，それまでの精神分析理論に対する単なる追加考察であるとか，メランコリーという新たな臨床事態を了解するための限定的な試みであるとみなすこともできるかもしれない。しかしながら，本稿では，フロイトの視座の変化を追跡しているので，その点から検討することにも価値がある。そのようにみると，自己愛的同一化においては，対象の働きを重視する視座への移行を推測することができる。もちろん，このことを直接指示するような証拠を論文の中に見出すことはできない。しかし，部分的ではあるが関係する内容を指摘することができる。つまり，フロイトは，この論文の中で同一化の役割の発達的な位置づけについて，「同一視は対象選択の前の段階であって，自我が対象を選び出す最初の方式―両立的な表れをする―である」と簡略にではあるが述べているのである（前掲書，p.142）。ここで，同一化においては対象の役割が重視されることを考慮すると，上記の記述は，発達の原初的な段階に対象の働きを認めたことになる。そして，精神分析理論が発達理論に軸足の一端を置いていることに照らすと，自己愛的同一化にみられる対象の重視が決して限定的なものではないことがうかがいしれるのである。

一方で，このような視座の変化があるとすると，自己愛の理解に関してはどのような影響がみられるのであろうか。単純に考えても，同一化を対象選択の前の段階に位置づける考察は，対象選択の前段階に，対象のない一次的な自己愛をおいていた推論とどのような整合性を持つのかという疑問に浮かぶ。しかしながら，そのことについての言及はみうけられない。一次的な自己愛に関係する記述としては，メランコリーに関する臨床観察の不足について弁明した中で，「もし観察と推論とが一致するとみなすことができれば，対象充当が自己愛の属する口唇的なリビドー期へ退行することを，メランコリーの特徴とするのをためらわないであろう」という箇所，ならびに，自殺の問題について考察する中で，「われわれは，自我の巨大な自己愛を衝動生活の発生する原始の状態と考えている」という箇所のみである。いずれも一次的な自己愛に関する詳細な考察とは言えず，それゆえ，論文全体の中では，自己愛（的）という用語は，リビドーが対象から自我へと撤退する作用そのものを意味するために用いられているようにみえる。

以上の点を補足するために，ほぼ同時期（1916 年から 1917 年）に執筆された「精神分析入門」を参考とすることができる。大学での講演記録にもとづく本書は，そのような成り立ちからフロイトの考察が網羅的に分かりやすく述べられている。自己愛についてもほぼ一章（第 26 講，リビドー論とナルシシズム）が割り当てられて，ここまでで取り上げてきた論点が広く言及されている。その中で，フロイトは，リビドー理論の発展と自己愛の着想を概略した後に，自己愛の一般性と発達的な起源について述べる中で，「多くの性の欲動は，はじめは自己の身体によって，われわれの言葉でいえば自体愛的に満足せしめられるものであるもの」であり，「自体愛はリビドー処理のナルシシズム的段階における性的活動」であると述べている（著作集，1，p.342）。ここでは，その前後の論旨の流れからいっても，一般にみられる自己愛的な心性が自体愛の性的活動に対応するかのような記述となっている。そして，特に後者の引用は，それまで個別の発達段階と位置づけられてきた自体愛段階と自己愛段階について，自体愛を性的活動のあり方とすることで両者を自己愛段階として包括するような表現になっている。ここに前段で述べた視座の変遷の影響もみることができる。ただし，フロイトは，この著書のあちらこちらで自己愛の問題についてはいまだ多くのことが研究の途上にあることを弁明している。また，その研究の現状における困難さと将来の課題についても包み隠さずに言及しているのである（「ナルシシズム的神経症の場合には，抵抗は克服できないのです。われわれはせいぜい高い壁に好奇の目を投げながら，壁の向こうで何事がおこっているかとうかがってみるばかりです。」前掲書，p.348）。したがって，前述の一次的自己愛に関する修正もいまだフロイトの中では確定的なものとはなっていないとみるのがふさわしいと思われる。

5．「集団心理学と自我の分析」

次に本稿の目的と密接に関連する著作としては，1921 年に書かれた「集団心理学と自我の分析」をあげることができる。そこでの主題の中心は，集団心理学に照らした同一化と自我理想の問題にある。その意味では，自己愛に直接結びつくものではないと思われるかもしれない。確かに，自己愛に関する言及は，いずれも部分的で断片的なものにすぎない。しかし，すでに見てきたように，同一化は自己愛の理解に密接にかかわる重要な問題である。

フロイトは，ル・ボンの「群集心理学」という著作を詳細に検討して，その中に描かれている集団における人間の心理的変化を取り上げている。そして，その記述の正確さを評価しつつも，集団の指導者に関する論考に不十分さがあることを指摘し，また，ル・ボンを含むその他の研究を概観して，集団形成の要因を指導者の暗示作用に求める見解を鋭く批判している。そして，リビドー理論による理解の可能性を提示して，集団内における個人放棄の現象を個人における自己愛の制限としてとらえ，その背景に個人間の（昇華された）リビドー的な結合を仮定するとともに，そこにあらわれる個人と対象との関係の考察に入る。そして，第一に対象との「同一化」の作用を取り上げ，そこに従来よりも拡充した役割をみいだすとともに，禁止された性的リビドーによる結合としての「ほれこみ」について取り上げ「自我理想」の形成を考察している。以上の考察にもとづいて，集団の形成過程を「同一の対象を自我理想とし，その結果お互いの自我を同一視しあう個人の集まりである」と公式化する（著作集，6，p.231）。さらに，最終的には，集団心理から得られた対象との「二重の結合様式―同一視と対象を自我理想のかわりに置くこと―への還元」に示されるような「このような一段階を自我について仮定する試み」（以上，前掲書，p.241）に取り組んでいるのである。

この著作の題目自体から，自我形成における対象の役割を探求しようとするフロイトの本来の意図を読み解くことができる。したがって，前節の考察を引き継いで一次的な自己愛に関する見解の変化が期待される。この著書の中では，すでに触れたことが幾分明瞭に読み取れる。つまり，自我理想に関する考察の中で，「それ（自我理想）は，小児の自我が自己満足を得ている根源的な自己愛の継承者であることもすでに述べた」（前掲書，p.226）という表現がみられるとともに，躁病の機制を論じる箇所では，「われわれは，出生とともに絶対的な自己満足にまどろむ自己愛から，変転する外界の知覚へと進み，対象の発見がはじまり…（略）」という記述がみ

られる。これらはともに，自己愛の発達段階における原初的な性質を強調している。同時に，自己満足の意味を従来のフロイトの表現方法にしたがって性的な満足であることを含みおけば，ここでの自己愛は自体愛をほとんど含むものと解することができるのであって，自己愛と自体愛の区別がフロイトの中で重要性を失いつつあることが推測される。このことは，「ナルシシズム入門」において言及されていた「ひとつの新しい心的作用」が一次的な自己愛について重視されなくなったことを意味している。それでは，この「ひとつの新しい心的作用」がフロイトの視座から完全になくなってしまったのかといえば，そうではないと思われる。筆者の読む範囲では，この問題は同一化に関する論考に引き継がれているのである。同一化の問題は，本著書の主題のひとつである。そして，フロイトは，同一化の働きを発達の原初的段階にまでさかのぼる考察を行っている。つまり，同一化は，「他人にたいする感情結合のもっとも初期の現れ」であり，「対象にたいする感情結合の根源的な形式」であるとされる。そして，それは，「リビドー体制の最初の口愛期の流れを汲んでいるのであって，渇望し尊重する対象にこれを食べてしまうことによって同化し，また，そのようにして対象を滅ぼしてしまう」ことに関係していると位置づけられる。また，フロイトは，対象備給との対比において，同一化の働きを明確にする考察にも取り組んでいる。つまり，たとえば男児の場合には，同一化は，「父親を理想にする」ことであり，性的な意味合いを本来的には含んではおらず，「父親（そしてまた男性一般）に対する受け身的な，あるいは女性的な態度とは何の関係もなく，すぐれて男性的なものである」とされる。そして，対象備給の働きと合わせて初期の対象との結びつきは，「母親にたいする自然な性的な対象備給と，父親にたいする典型的な同一視」としてまとめられる。

同一化の概念そのものについては，上記の個所の考察が第一に重要であると思われるが，本稿の課題との関連では，そののちに引き続き議論される以下の内容が非常に重要である。フロイトは，上記の論考の直後で，「父親との同一視は父親との対象結合の先駆のなってしまう」ことがおこりやすことを指摘し，父親への同一化と，父親を相手に選ぶ対象選択の区別を公式化して，前者では「父親はそうありたいとおもうところのもの」であり，後者では「父親は持ちたいとおもうところのもの」であるとしている。そして，フロイトは，「さらにこの錯綜した関係の中から，神経症の形成されるさいの同一視をとり出してみよう」と導入し，母親とおなじ苦痛な症状（苦痛なヒステリー様の咳）に悩む少女を例に引いて，そこにみられる同一視が「敵意に駆られて母親の代りをしようとする欲求を意味するエディプス・コンプレックスから生まれた同一視」であって，「父親への対象愛を表現していることもある」ことを説明する。また一方で，その症状が「愛している人と同じ症状の場合」もありうることを指摘して，その間の経緯を「同一視は対象選択のかわりに現われ，対象選択は同一視に退行した」とまとめているのである（以上，前掲書，222-223）。

以上の箇所の論述には若干の錯綜があるように思われる。少なくとも説明に若干の不足がみうけられる。その点を筆者なりの理解から補足していえば，この個所の論考は以下のようなことを述べている。フロイトによる苦痛な咳に悩む少女の例に従えば，少女は，発達の初期に同性の親である母親への同一化と，異性の親である父親への対象備給を形づくる。そこから，エディプス・コンプレックスの段階に達し両親の関係に気付き始めると，少女の父親を求める欲求は敵対的な母親の存在により容易ならざる事態に直面する。その際，少女は，母親にとって代わることを母親への同一化を通じて達成しようとするが，同時に罪悪感に見舞われて苦痛な咳というヒステリー症状によって自己処罰をおこなう。これがフロイトのいう「ヒステリー症状の完全な機制」（前掲書，223）である。ただし，別の解決法がとられることもあるのであって，それは，愛する父親と同一化することで，父親を自らのうちに取り込むことである。それにより，父親との対象結合は放棄することになるが，愛する父親を常に内面に保持することができるのである。ここに示される対象関係から同一化への移行が，フロイトが「対象選択は同一化に退行した」とまとめていることに相当すると思われる。以上で，同一化への退行の問題は整理されたが，もう一段階展開が進むものと思われる。つまり，その少女は，父親に同一化することによって対象を自己の中に取り入れるが，そうすることで少女自身は自らを父親の位置に置くことになる。その結果，本来同一化の対象であった母親が，今度は対象結合の相手となる可能性が生じる。このような転移を経ることにより，初期の同性の親への同一化は対象結合に結果する。ここにみられる一連の流れが，前段で引用した「父親との同一視は父親との対象結合の先駆となってしまう」という連関にあたるものと思われる（咳をする少女の例の場合とは性別が逆転している）。

本校の課題にとってこの個所の考察が重要であるのは，対象選択から発達早期への退行の問題が同一化への退行として論じられているからである。「シュレーバー・ケース」と「ナルシシズム入門」においては，同じ問題が二次的自己愛として論じられていた。つまり，二次的自己愛では，対象へのリビドー備給が対象から自我に撤退するとされ，その起源に一次的自己愛が想定されていたのである。一方で，ここでは，対象選択は同一化へと退行し，その同一化により自我はさまざまな特徴を身につけていくとされている（「このようにして自我が対象の特性を身につけることはよく起こるのである。」前掲書，p.223）。以上のような対応関係と，前段で述べた自己愛概念の移行を考慮すると，本著書で示されているフロイトの考察は，従来の自己愛に関する理論との関係でいえば，一次的自己愛の自我の萌芽としての意義が同一化の過程にゆずりわたされたことを示唆しているように思われる。つまり，「ナルシシズム入門」において「ひとつの新しい心的作用」として自己愛に帰せられていたものが，早期から始まる対象との同一化によって徐々に確立されていくものと位置づけられているのである。

一方，この著作のもうひとつの主要命題であるほれこみと自我理想の方に目を向けると，そこでも自己愛に関係する言及は多くみられる。フロイトは，この自我理想の理想としての性質について，第一に異性に対する情愛的な欲動の直接的な目標達成の禁じられたものとして論じることから始めている（「この種の男性は，深く敬愛している婦人に熱狂的な愛着を示すが，しかも彼女から性愛の刺激を受けても興奮しないのである。（中略）目標を禁じられた情愛的な衝動の関与する度合によって，ただたんに感覚的な欲望とは反対のほれこみの強さをはかることができる。」前掲書，p.227-228）。しかし，その直後に，フロイトは，このほれこみにみられる対象の理想化の起源を自己愛にもとめる考察をおこなっている。すなわち，

「ほれこみの状態では自己愛的リビドーが大量に対象に注がれることを認めている」，そして，そのようなほれこみが極端な状態になると「対象は自我の自己愛のすべてを所有するようになり，その結果自我の自己犠牲が，当然の結果として起こってくる。いわば対象が自我を食いつくしたのである」（前掲書，p.288）。

ここで自己愛との関係で想起されるのは，フロイトが「シュレーバー・ケース」の中で，シュレーバーが訴えた世界崩壊の破局を引き起こすリビドーの外界からの撤退と対比させて，注釈でふれている「一切のリビドーが外界の一つの愛情対象（恋人）に集中的に備給されつくしてしまう」こと（著作集, 9, p.337）である。そして,「ナルシシズム入門」において新たに導入された自我リビドーと対象リビドーの対立関係の仮説にもとづいて，対象リビドーの最高の発展段階としての「恋着」，すなわち，「対象への割り当てに対して自己の人格を放棄する」という現象に関することである。ここでもほれこみの場合と同様に，自我は対象に圧倒されてしまうのであるが，ここで問題になっているのは対象への過度の備給なのである。そのことを考慮するならば，いずれの理論的説明も成り立つかもしれないが，少なくとも本著作においては，フロイトは，対象へのリビドー充当による自我の喪失を自己愛の側から説明することによって，自己愛の概念を保持していることがわかる。

６．同性愛の問題と「嫉妬, パラノイア, 同性愛に関する二, 三の神経症的機制について」

ここまでの筆者による自己愛に関する考察は，やや込み入ったものとなってしまったが，当初意図するところはそれほど複雑なものではなかった。つまり，相澤（2008）の自己愛に関する定義（幼若な心性に対しそれに関わる者が成熟した自分を前提に相手に付与する判断）の妥当性を検討するためにフロイトの著作に注目した。そして，すでにフロイトの自己愛の概念が当初の導入期（「シュレーバー･ケース」と「ナルシシズム入門」）から後期にむかって若干の，しかし，重要な変化を見せるということをすでに知っていたので（ラプランシュとポンタリス，1967，村上監訳，1977，p.336），そこにフロイトの何らかの視座の変化を想定したのである。それは，“自分”すなわち自我から対象へ向かっての視座の重点の移行であって，そのことは，特にフロイトが「集団心理学と自我の分析」において示した同一化（同一化は対象にかかわる問題である）の拡充に関係しているものと考えられた。以上の仮説を検討する目的で，それぞれの時期の著作を細かく検討してきた。

筆者の目的は，一定程度達成されたということはできる。なぜならば，前項でみてきたように，確かに同一化の働きが発達原初に位置づけられることによって，一次的な自己愛と自体愛との区別が重視されなくなっている。そして，このことは，自己愛におかれていた自我の萌芽としての意義が，対象との同一化の過程に譲り渡されたものと考えられた。言いかえるならば，「ナルシシズム入門」で重視されていた「ひとつの新しい心的作用」の形成は，同一化の働きによって長年にわたって繰り返される対象とかかわりにより順次形作られていくものと修正されたのである。このことは，フロイトの視座が“自分”から“対象”に移行するにつれて，一次的な自己愛の当初の意義が減じられていったことを示しているからである。しかしながら，筆者の当初の比較的単純な仮定では十分でないことも同時に示された。なぜならば，一次的な自己愛には，自我の萌芽としての意義のみならず性的リビドーの働きが必須なものとしてともなっている。しかし，同一化は，本来性的な意味合いをもつものではない。したがって，上記の視座の移行が性的リビドーの領域においてもなされることで，はじめて筆者の仮定は十分に検証されたこととなる。にもかかわらず，フロイトは，この時点においては，対象備給に原初的な位置づけを必ずしも与えていないようにみえる。そもそも,「性欲論三篇」(1905 年) では，小児の原初的段階の性活動においては対象がないことが強調されて自体愛と呼ばれた（「この性的活動のもっとも著しい特質としては，この欲動が他人に向けられたものではないという点を強調しておこう。」著作集, 5，p.46）。また，その後の「精神分析入門」においても同様である。小児のもっとも初期の活動と位置づけられている口唇期を例にとってみれば，乳児は，食物摂取を母親の乳房という対象を通じておこない，その際に，口唇部に性愛的な快感を体験するとされている。しかし，それは，乳房という対象に性愛を体験したものではなくて，食物摂取の際の口唇と乳房の接触にともなって付随的に生じたのみのものと位置づけられる（委託的）。そして，基本的にフロイトは，この考え方を非常に重要視して後年にいたっても変更していないようにみえるのである。それゆえ, 自己愛の問題に目を向けるならば，次のような事態になっている。つまり，図式的に考えることが許されるならば，自己愛の性的リビドーにかかわる部分は，いまなお対象に移行されずに残存することとなり，そのことが自体愛段階も含めて自己愛段階と一括して呼ばれることにつながっている。このことは，前節のほれこみと自我理想に関する論考の中に明確に示されているのである。

この点が自己愛に与えている影響を検討するために，同性愛に対する理解のあり方を題材にとることができる。第２項の末尾で，すでにフロイトが同性愛解釈について２つのものを提示していることは触れた。それは，シュレーバーとダ・ヴィンチにおのおのみいだされたものである。そして，両者が視座の位置づけによって，すなわち, ダ･ヴィンチのそれを自我にのみ注目して理解すればシュレーバーのそれになりうるという理解を示しておいた。しかし，同時に両者には発達的な位置づけの差異があることが簡単な読み替えを不可能にしていることも付け加えた。そのことをダヴィンチの理解において中心となっていた母親との一体化，すなわち，対象備給をいかに原初的な位置におくかという問題と理解すれば，ここで取りあつかっている論点そのものに対応することになる。

「ナルシシズム入門」の後のこの主題に関する論考は，当の「集団心理と自我の分析」の中にみいだすことができる。そこで，フロイトは，同一化の節の後半で未だ理解の及ばない現象としてこのことについて考察している。そこでは,「若い男はエディプス・コンプレックスの意味で，彼の母親に長い間固着して」いるが,「思春期が完了したのちに，ついに母親と他の性的対象を取りかえる時期がくる」。しかしながら，同性愛の解釈においては，この段階で突然の方向転換が起こり,「若者は母親を捨てないで自分と母親を同一視して，彼女の中に自分を転化しいまや彼の自我の代理となるような対象を求め，その対象を彼が母親から経験したように愛し世話する」ようになるとされる（著作集，6，p.224-225）。ここで示されているのは，明らかにダ・ヴィンチにおいて論じられていた同性愛

の解釈過程である。

この点で2つの点を確認することができる。そのひとつは，この論文では同性愛はダ・ヴィンチの発生過程しか論じられておらず，シュレーバーのそれには触れられていないということである。このことは，前述の2つの同性愛解釈に視座の問題を読み解く理解と整合性をもつ。なぜならば，すでにみてきたように「集団心理学と自我の分析」は対象への視座が重点化されている著作であるからである。ふたつ目の点としては，フロイトが前述の引用部の冒頭で「エディプス・コンプレックスの意味で」と強調していることである。このことは，同性愛的願望の固着がエディプス期以降の対象備給にあることを示している。それゆえに，シュレーバーの同性愛的願望のもとにある一時的な自己愛とは，発達段階上で相当ずれがあることになる。したがって，この時期においても第2項で触れた困難さは該当することになる。そして，このことには，フロイトが（同一化と違って）対象備給については原初的なものとは認めていないことが対応しているのである。

1922年に書かれた論文，「嫉妬，パラノイア，同性愛に関する二、三の神経症的機制について」の中で，よりいっそう後期のフロイトの同性愛理解を知ることができる。フロイトは，同性愛の節の冒頭において，「これまで固く母親に結ばれていた青年が，思春期をすぎて二，三年後に方向転換をして母親と自分を同一視し，そして愛の対象を探し求め」，「かつて母親が彼を愛したようにその対象を愛することになる」と，ダ･ヴィンチ型の理解を簡潔に述べる。そして，その発達的な発生過程について，「まず母への固着があって，これが他の女性対象へ移り行くのを妨げる。母親との同一視は，母親との対象結合の終末であるとともに，この最初の対象にたいしてある意味で忠誠をまもることを可能にしている」とし，「ついで自己愛的な対象選択の傾向がくる」と論じる。その上で，新たな対象にペニスがないことによる幻滅と父親との競争の回避という去勢コンプレックスの影響も付けくわわって，新たな対象への移行が困難化するとしている。そして，以上の発達的な推移を「母との結合―自己愛―去勢不安」という流れとして表現しているのである（著作集，6，p.260）。

ここでのフロイトの記述は若干微妙な表現を含んでいる。最後に定式化された発達的な推移は，自己愛の前に母親（異性）対象をおいているために，一次的な自己愛の前に対象備給の働きを認定しているようにみえる。しかし，その前の「母親との同一視は，母親との対象結合の終末である」という記述がその可能性を否定する。つまり，この対象結合の放棄はエディプス期に該当するのであって，したがって，ここで述べられている流れはエディプス期に属するものであることがわかる。したがって，ここでの自己愛とは，従来の一次的な自己愛をさしているのではなく，エディプス期における父親との結合のことをさしていることになる。言い換えるならば，ここでの論述では，対象備給の働きが前倒しされたのではなく，自己愛が後ろにずらされたのである。以上のように見れば，やはりここでの同性愛理解もダ・ヴィンチのそれであって，母親対象への固着を強める要因が追加的に述べられているに過ぎない。

以上のように，同性愛についてのフロイトの解釈は，「シュレーバー･ケース」で異なった理解のあり方が示された以外は，ダ･ヴィンチにみいだされた理解に一貫している。そして，常にその起点をエディプス期以降の対象選択に位置づけているのである。

7．「自我とエス」

前著論文でも取り上げたとおり，1920年以降のフロイトの著書は大規模な視座の展開を示すようになる。特に，「快楽原則の彼岸」（1920年）において図られた，恒常原則，ならびに，「自我または死の本能」と「性または生の本能」の二元論の導入は，それまでのフロイトの基本的な理論仮説の大幅な更新に相当するといえる。おなじようなこと，あるいは，それ以上のことが，「自我とエス」（1923年）ではなされており，それまでの意識・前意識・無意識という概念から，個人の全存在ともいえるような「エス」とその表層部を構成する知覚－意識体系，ならびに，それに発する自我，くわえて，抑圧作用からなる新たな局所論的な叙述が試みられている。以上のような大幅な視座の展開にあっては，もはやそれを幾分かでも正確に追いかけることが非常に困難とならざるをえない。しかしながら，前項で示した課題が残されている以上，できる限り検討する必要があろう。

この時期のフロイトの著作の中で，自己愛を（ないしはそれに関係する主題について）もっとも詳細に論じているのが「自我とエス」である。この著書の主要な命題を概略するならば，従来の意識･無意識概念の再検討と新たな局所論的叙述の導入，超自我概念の導入とその検討，ならびに，本能論の再度の検討と自我の新たな位置づけとしてまとめられるであろう。自己愛については，以下の記述がみられる。つまり，「自我が対象の性状を身につけるとき，いわばエスにたいしてさえ，愛の対象としての関係をむすぶことを強いる。そして『見たまえ，お前は私をも愛することができる，私は対象にそれほどにているのだ』といって，対象の喪失を代償することをもとめる」とし，これを対象リビドーから自己愛リビドーへの移行としているのである（前掲書，p.276）。新しい概念により記述されているために分かりにくくはなっているが，リビドーの対象から自我への移動を論じている点で二次的な自己愛のことをさしていることがわかる。また，別の箇所では，「エスはこのリビドーの一部分をエロス的対象備給におくり，次に強化された自我はこの対象リビドーを占有（わがものに）し，自己をエスにたいする対象たらしめようとする」とし，この関係をはっきりと「自我の自己愛はこのように二次的なもの（二次的自己愛）すなわち対象から撤退したものである」と述べているのである。以上の論考では二次的な自己愛が強調されていることがわかる。

一方で，一次的な自己愛についてほとんど言及されていない。わずかに注釈の中で述べられている以下の箇所のみである。「われわれは自我とエスを区別した結果，『ナルシシズム入門』で述べた意味で，エスをリビドーの大きな貯水池とみなさなければならない。先に述べた同一視によって，自我に注ぎ込むリビドーは『自己愛』をつくる」（傍点原訳文どおり，前掲書，p.278）。ここでいう同一視とは，その前の個所で述べられている性愛的対象との同一化のことであるから，後半の記述は二次的な自己愛のことを指している。そして，それに強調までつけてさらに「つくる」としていることの含意から，一次的自己愛は問題にされなくなっていることが理解できる。

一方で，対象との関係に関する記述，つまり，同一化と対象備給

の位置づけに目を向けてみると，まっさきに目につくのは同一化の原初的な位置づけを強調する下記の箇所である。「というのは，自我理想の背後には個人の最初のもっとも重要な同一視がかくされているからであり，その同一視は個人の原始時代，すなわち幼年時代における父との同一視である。これは一見，対象備給の結果，あるいは転帰とはみえない。むしろそれは直接の，媒介なしの同一視で，どの対象備給よりも早期のものである」（著作集，6，p.278）。ここでも，同一化は，発達的に最も早い時期から働きはじめるものとされている。そして，同時に同一化を対象備給よりも早期に生じるものとしているようにみえる。しかし，その少し前で同一化の重要性に言及した直後にフロイトは，「個人の原始的な口唇期のそもそものはじめにおいては，対象備給と同一視とは，おそらくおたがいに区別されてはいなかったにちがいない」とも述べている。そしてまた，男児の場合の発達過程を，「非常に幼い時期に，母親に対する対象備給がはじまり，対象備給は哺乳を出発点とし，依存型の対象選択の原型を示す一方，男児は同一視によって父をわがものとする」と論じているのである。これらの記述からは，当時のフロイトが，対象備給を同一化とほぼ同程度に発達早期から働きはじめるものとしていたことが読み取れるのである。

以上のことは，確かにこの論文の中で，一次的な自己愛の概念上の消失と対象備給の早期化が同時に達成されていることを示している。したがって，ここでも前節までのフロイトの視座に対する推定に従って，自我から対象への重点の移行が自己愛概念の更新に結びついたといいうるかもしれない。しかしながら，「自我とエス」のなかにおける全体的な論旨にしたがえば，上記の推定は必ずしも当てはまらないことがわかる。明らかに，ここでは，エス，自我，超自我により構成される新たな局所論的見解への移行が，一次的な自己愛に関する理解の推移に関係しているからである。すなわち，自我は，エスから発し知覚体系に由来するその表面に局限されることとなり（この論文では自我の意義が非常に限定されたものになっている），リビドーは発達原初の段階では（自我ではなく）エスに蓄積されているとみなされるようになった。そのために，一次的な自己愛，すなわち，発達原初の段階においてリビドーが自我の中に鬱積するという考え方はおこなわれなくなったといえるのである。

ここで，可能であれば，前節までで確認してきた自我から対象への視座の移行と，この著作におけるフロイトの視座との関係を検討しなければならない。しかし，その課題は非常に困難であるように思われる。相澤（2008）は，この著書におけるフロイトの視座を検討することの困難さを指摘しながら，局所論的観点と相対的な対極性を重視する視座を指摘しうるものとしている。そして，その点に関する論考が，従来の生物・生理学的知見になぞらえた記述（「快楽原則の彼岸」）や原始社会に関する歴史的な知見（「集団心理と自我の分析」）の援用にほとんどよることなく，独自の「メタサイコロジー的な叙述」によって行われているために思弁的といいうるような外観を呈しているものとしている。そのようなある意味で抽象的とでもいえるような視座への移行を跡付けることは筆者には大変困難なように思われるのである。

8．まとめ

以上のように，自己愛を詳細に論じたフロイトの考察を検討することで，そこから推定される視座の変遷をみてきた。その結果，1911 年の「自伝的に記述されたパラノイア（早発性痴呆）の一症例に関する精神分析的考察」と 1914 年の「ナルシシズム入門」においては，比較的自我を重視する視座から考察がおこなわれていたのに対して，1917 年の「悲哀とメランコリー」（同年「精神分析学入門」）をへて 1921 年の「集団心理学と自我の分析」にいたる中で，特に同一化の働きの拡充を通じて対象の役割を重視する視座に移行したことが推定された。そして，その変化に応じて，自己愛の位置づけについては，一次的な自己愛の段階が自体愛と一体化されて区別されなくなる推移がみうけられた。それは，当初自己愛におかれていた自我の萌芽としての意義が，対象との同一化の過程に譲り渡された結果であるとみなされた。

ただし，対象備給に関しては，1921 年の段階においても対象の役割が拡充されることはなかった。そのことが従来の自己愛段階と自体愛段階を含めて自己愛という概念が用いられることに結び付いているものと思われた。さらにそれ以上の進展は，1923 年の「自我とエス」（およびその時期の著作）によってなされたようであったが，その時点におけるフロイトの視座を推し量ることは大変困難であった。少なくとも自我から対象への移行というのみでは説明しきれないものと思われた。

以上のように不十分なものではあるけれども，筆者の当初の目論見からみれば一定の成果をみいだし得たものと判断できる。なぜならば，フロイトが自我を重視する視座にあって発達の原初的段階を論じた時に一次的な自己愛という概念が提起され，対象へと視座が移行していくにつれてあまり問題とされなくなる流れを部分的にでも確認できたと考えるからである。また，相澤（2008）において確認したフロイトの全体的な視座の流れとも整合性をもつものであると思われる。つまり，そこでは，「ヒステリー研究」に代表される初期の研究においては，フロイトが，比較的自分が語るのと同じように患者も語っていることを前提とするような論述をおこなっていた時点から，1915 年に書かれた一連の著作によってひとつの大きな視座の展開が図られていた。そして，自己愛に関する中心的な著作（「自伝的に記述されたパラノイア（早発性痴呆）の一症例に関する精神分析的考察」と「ナルシシズム入門」）はその直前に書かれており，いずれも自我にかかわる考察への導入と位置付けられていた。そのような時期に，フロイトが自我（自分）に視座の重点をおいて論考をおこなったことは十分に推測できるのである。

---

1) 相澤（2008）でも述べたとおり，この仮説の着想は，辻（2003）によるフロイトの「投影」に関する考察に基づくものである。辻は，「シュレーバー・ケース」の中におけるフロイトの「投影」の着想について，「投影は現象形としては『内的な知覚が外界の知覚という形で意識される』ということになろうが，それが成立するためにはその内的な知覚の抑圧と一種の歪曲が必要」となり，「抑圧・歪曲がおこなわれるためにはそれを営む主体（主語）の働きが前提とされなければならず，その着想はわれわれが通常親しんでいる主語が支配・主導する成熟型の論理形態にしたがっている」ことを指摘している。そして，辻自身により理解の範疇におかれた原初的な体験（原体験）の働き

としての「述語･状況性の支配･主導性」の理解枠からの，「(同一の箇所のフロイトの記述に挿入された）具体例に示されている「私は彼女を愛している」と「彼女は私を愛している」とでは，「愛している」という述語部分が２つの思考内容で一貫している，つまり支配・主導していて，主語部分が交代している」という理解を提示して，投影の概念を主語同一性からみた「内的な知覚が外界の知覚という形で意識される」よりも，「内的な体験が外界に位置づけて体験される」とするほうが適切であるとしている（以上，同著書，p.112-113,114)。ここで述べられている「主語が支配・主導する成熟型の論理形態」というのが筆者の仮説のもとになっているのである。また, 辻（2008）は，前述の箇所に引き続いて「シュレーバー・ケース」に関する原体験の理解枠からの論考もおこなっている。そこでは，自己愛という概念については言及されていないものの，フロイトが自己愛の概念によりとらえたシュレーバーの内面世界の特徴は，ロールシャッハテストによる（妄想を示した）事例 ST について述べられた「さながら聖域のごとくに，問題を意識するような余地がまったく与えられておらず，ネガティブな体験を内的に包含することができない」様態として理解の枠組みに位置づけられているものと思われる（前掲書，p.71)。ただし，筆者の自己愛（という概念の発生）に関する仮説と，以上の辻による主語同一性論理ならびにシュレーバー・ケースへの理解と関係については，なお詳細な検討をおこなう必要がある。

2) 本稿の考察は, 邦訳版「フロイト著作集」によっている。したがって，引用箇所については（著作集 , 巻数 , 頁数）という表記を用いた。また，末尾の引用文献欄も，出典元の「著作集」を掲載するにとどめた。

3) 本稿における同性愛とは，精神分析理論に基づいて構成された心理学的解釈を指しており，実際の同性愛とは次元の異なるものであることにはくれぐれも留意願いたい。この点を明示するために，本文の中では表現に不自然さがともなわない範囲で，できるだけ「同性愛的願望」や「同性愛解釈」といった表現を用いることとした。フロイトも，「性欲論三篇」の中で現実の同性愛には多種多様な場合がありうることを指摘している。

4) 「同一化（identification）」は,「同一視」と邦訳される場合もある。本稿では，本文中では「同一化」をもちいているが，引用文中に「同一視」の訳語があてられている場合にはそのまま記載した。

≪引用文献≫

相澤直樹 (2008). 自己愛（narcissism）概念の再検討に向けて―フロイトにおける視座の展開に照らして①　神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 , 2, 129-138.

生松敬三・井村恒郎・小此木啓吾・懸田克躬・高橋義孝・土居健郎（編）(1970). フロイト著作集　第５巻　人文書院

生松敬三・井村恒郎・小此木啓吾・懸田克躬・高橋義孝・土居健郎（編）(1970). フロイト著作集　第６巻　人文書院

生松敬三・井村恒郎・小此木啓吾・懸田克躬・高橋義孝・土居健郎（編）(1974). フロイト著作集　第７巻　人文書院

井村恒郎・小此木啓吾・懸田克躬・高橋義孝・土居健郎（編）(1969). フロイト著作集　第３巻　人文書院

井村恒郎・小此木啓吾・懸田克躬・高橋義孝・土居健郎・生松敬三（編）(1971). フロイト著作集　第１巻　人文書院

井村恒郎・小此木啓吾・懸田克躬・高橋義孝・土居健郎・生松敬三（編）(1983). フロイト著作集　第９巻　人文書院

北山修監訳 (2005). フロイト全著作解説　人文書院

Laplanche, J. & Pontalis, J.-B. (1967). *Vocabulaire de la Psychanalyse*. (5^{e}édition). Paris: Press Universitaires.

（村上　仁（監訳）(1977). 精神分析用語辞典　みすず書房）

小此木啓吾 (1985). 現代精神分析の基礎理論　弘文堂

辻　　悟 (2003). こころへの途－精神・心理臨床とロールシャッハ学　金子書房